



学校便り 琢磨

第18号 R2.9.2 三豊市立詫間小学校

た 栄光を讃える！

8月29日(土)。観音寺総合運動公園にて、「三観広域陸上競技選手権大会」があり、本校からも5、6年生が出場しました。これまで、新型コロナウイルス感染防止のため、様々な大会が中止となり、この大会出場が本年度最初となりました。結果は、以下のとおりです。暑い中、よくがんばりました。栄光を讃えます。

- | | | | |
|-----------|----|-------|-------|
| 6年男子 100m | 7位 | 森優翔 | 14.77 |
| | 8位 | 川原瑛太 | 14.79 |
| 6年女子 100m | 3位 | 畑中優利 | 14.31 |
| | 4位 | 真鍋星風 | 14.72 |
| 5年男子 100m | 3位 | 大山斗亜 | 15.14 |
| | 6位 | 資延侑梨弥 | 15.41 |
| 5年女子 100m | 2位 | 松村みそら | 15.57 |
| | 5位 | 山口有愛琉 | 16.05 |



6年男子 4×100mR

- | | | |
|----|-----------------------------|-----------|
| 2位 | 詫間小 A (川原瑛太・森優翔・池田梓月・中西勇翔) | 58.72 |
| 6位 | 詫間小 B (佐古琉月・中西伶斗・山口歩登・小林清流) | 1 : 03.40 |

6年女子 4×100mR

- | | | |
|----|------------------------------|-----------|
| 1位 | 詫間小 A (真鍋星風・山脇優月・矢野帆乃香・畑中優利) | 58.05 |
| 6位 | 詫間小 B (富山夏未・津々池優・尾崎志保・汐見凜心) | 1 : 02.85 |

5年男子 4×100mR

- | | | |
|----|-----------------------------|-----------|
| 1位 | 詫間小 A (糸幸樹・資延侑梨弥・妹脊心・大山斗亜) | 1 : 00.86 |
| 5位 | 詫間小 B (河原龍空・河内大地・亀井惺天・久保天晴) | 1 : 03.35 |

5年女子 4×100mR

- | | | |
|----|--------------------------------|-----------|
| 1位 | 詫間小 A (山口有愛琉・山下稀歩理・松村みそら・山地愛子) | 1 : 02.20 |
| 4位 | 詫間小 B (大坪愛依・田尾友里愛・富山琴音・岩田優恵) | 1 : 04.60 |

音楽室の楽器演奏コーナーが完成しました！

「感染予防と教育活動充実の両立」を図るため、音楽室に「飛沫を防ぐ柵を設けた楽器演奏コーナー」を設置しているとお知らせをしていますが、この度、完成しました。運動場の窓側に、最大12人が一度に練習できるコーナーです。音楽室の前方から、「青のコーナー」(4人)、「黒のコーナー」(4人)、「グレーのコーナー」(4人)となっています。

来週の月曜日(7日)から、このコーナーを使って、音楽の時間にリコーダーや鍵盤ハーモニカの演奏の活動も始めようと思っています。

写真はイメージです。実際は、演奏はしていません。



夏休みの美術の作品が入選してしまったこと

あれは、私が中学3年生だった8月31日のことでした。毎年このように「今日で夏休みが終わるというのに、まだ宿題がたくさん残っている。あ～あ、なぜ、もっと計画的にできなかったのか。とても、明日までには終わりそうもないなあ…」と、出るのは後悔の気持ちがいっぱいだった、ため息ばかりでした。

それでも、がけっぷちに立つと力も出るものです。夜の10時頃には、あと1つの宿題を残すまでになっていました。しかし、あと1つというのが大問題でした。残っているのは工作か四つ切画用紙に絵をかく宿題でした。「今から絵をかいていたら、朝までには終わらない。こうなったら工作しかない。」あまり絵をかくのが得意ではなかった私は、夜の10時から工作に取りかかったのです。しかし、時間が時間だけに、まともに工作に取りかかっては、ぜったいに間に合いません。材料を買おうと思っても、お店はどこも開いていません。そこで、「何か、家に工作の材料となるものはないかな？」と、おし入れの中を探し始めました。すると、段ボールの箱の底から、木の板を彫刻刀（ちょうこくとう）でほって「忍耐」という字を浮かび上がらせた、いかにも手作りという姉の作品を見つけました。「忍耐」とは「(にんたい) 苦しさやつらさに、がまん強くたえしのぶ」という意味です。姉が中学生の時に、美術の時間に作ったとは聞いていました。「これは使える！」そう考えた私は、その近くにあった板と赤い布をいっしょに取り出して、「姉の作品」には黒と銀色の絵の具をぬり、板には赤い布をはりつけて、裏から「姉の作品に色をぬった物」をくぎで打ちつけ、わずか30分ほどで、工作の作品を完成してしまったのです。

始業式から1週間が過ぎました。「あっ、真鍋君。美術の先生が、帰る前に職員室に寄るようになって。」と、担任の宮武先生から声をかけられました。私は、はっとしました。悪いことはできないものです。きっと、美術の先生は、長い間この中学校にいるから、4歳年上の姉が作ったあの作品のことを覚えていたのでしょう。とても厳しい先生です。これは大変なことになると青ざめた顔で、私は職員室に入りました。

ところが、「おお、真鍋君。わざわざご苦労さん。いやあ、君の夏休みの工作。実に素晴らしい作品だったよ。さぞ、時間がかかっただろうね。それでだ、君の作品を展覧会に出すことにしたよ。」と、全く思っていたのとは逆の言葉を美術の先生からかけられたのです。ずるがばれなかった安心感で、私は、本当のことを言うことができませんでした。そして、「まあ、展覧会に出したところで、入選するはずもないし、参加賞をもらって終わりだ。」という軽い気持ちもわいてきました。

悪いことはできないものです。それから1か月ほど経って、また、美術の先生から呼び出されました。「真鍋君、おめでとう。君のあの作品、特選に選ばれたよ。1番だよ。いやあ、よかった。よかったなあ。」私は、こんなに悲しい知らせをそれまで聞いたことがありませんでした。大変なことになってしまいました。その場でも、いや、こうなったらかえって、本当のことは言えなくなってしまったのです。

それからのことは…。全校集会で、私一人だけがステージに呼ばれ、校長先生から特選の賞状をいただきました。全校生の大きな拍手が、私を責めているように聞こえました。私の作品が中央に置かれている作品展の案内をいただきましたが、もちろん行きませんでした。両親からは「そんな人間に育てた覚えはない！」と、こっぴどくしかられ、姉からは、「あんた、何してくれとん、はずかしいと思わんの？」と責められ…。おそらく賞状も捨ててしまいました。私の「忍耐」の日々は、こうして続きました。

それからしばらくして、私は、担任の宮武先生に、放課後、あの作品を持って真実を打ち明けました。宮武先生は、数学の若い女性の先生で、私たちが卒業すると、結婚のため教師を辞めて九州に引っ越すことが決まっていました。「ふーん、そうなんや。でも、私は、これは真鍋君の作品だと思うよ。確かに字をほったのはお姉さんだけど、色をぬって板に布を張りつけて完成させたのは、君のアイデアで、君が作業したのだからね。気にすることないよ。」と、おっしゃってくださいました。そして、「この作品、気に入ったから先生がもらうわ。ありがとう。」と、私の返事も聞かずに、先生はその作品を持って行ってしまいました。

ですから、私は、あの作品をあの時以来見たことがありません。見なくてすんだのかもしれませんが。

もしかしたら、今も、あの作品は、九州の宮武先生の家にあるのかもしれませんが。

私が、この話を書けたのも、60歳を前にして工作が大好きなもの、きっと宮武先生のおかげですね。